

病むごとくに、
母は歎きぬ。
『身熱に汝は乳母焦がし、
また、JOHNよ、母を。』と。——今も
われ青む。かかる恐怖に。

梨

ひと日なり、夏の朝涼、
濁酒賣る家の爺と
その爺の車に乗りて、
市場へと。——途にねむりぬ。

山の街、——珍ら物見の
子ごころも夢にわすれぬ。
さなり、また、玉名少女が
ゆきずりの笑も知らじな。

その歸さ、木々のみどりに
眼醒むれば、鶯啼けり。
山路なり、ふと掌に見しは
梨なりき。清しかりし日。

鶏頭

秋の日は赤く照らせり。
誰が墓ぞ。風の光に

鶏頭の黄なるがあまた
咲ける見てけふも野に立つ。

母ありき、髪のはつれに
日も照りき。み手にひかれて
かかる日に、かかる野末を、
泣き濡れて歩みたりけむ。

ものゆかし、墓の鶏頭。
さきの世か、うつし世にてか、
かかる人ありしを見すや、
われひとり涙ながれぬ。

椎の花

木の花はほのかにちりぬ。
日もゆふべ、椎の片岡、
影さむみ、薄ら光に
君泣きぬ、われもすがりぬ。
髪の香か、目見のうるみか、
衣そよぎ、裾にほそぼそ、
蟲啼きぬ、——かかるうれひに。

ああ、かくて、君よいくとき、
かく縫り、かくや泣きけむ。
そのかみか、いまか、うつつか、

さて知らじ、さきの世のゆめ。

男の顔

ふと見てし男の顔は
夜目ながら赤く笑ひき。
そことなく囃子きこえて
水祭ふけし夜のほど、
乳母の背にわれねむりつつ、
見るとなく彼を憎みぬ。
その顔は街の灯かけを、
あかあかと歩みつつあり。
乳母もさは添ひてかたりぬ。

かくて世にわれただひとり。
大太鼓人は拵ちつけ
後より絶えず戯けて
嘲りぬ。——われは泣きにき。

水ヒアシンス

月しろか、いな、さにあらじ。
薄ら日か、いな、さにあらじ。
あはれ、その仄のほひの
などもさはいまも身に泌む。
さなり、そは薄き香のゆめ。
ほのかなる暮の汀を。

われはまた君が背に寝て、
なにうたひ、なにかかたりし。

そも知らね、なべてをさなく
忘れし日にはあれども、
われは知る、二人溺れて
ふと見し、水ヒアシンスの花。

鶯鳥と桃

なにごとのありしか知らず、
人さには立ちてながめき。

われもまた色あかき桃
掌にしつつ、なかにまじりぬ。

河口に今日しはじめて
小蒸汽の見えつるといふ。

朝明の霧にむせびし
西國の新らしき香よ。

そが鈍き笛のもとより、
鶯の鳥は鳴きてのぼりぬ。

ひとむれのその鳴きごゑよ、
しらしらとわれに寄り來つ。

そはかなし、『見も知らぬ兒よ、
汝が紅き實を欲し。』といふ。

いひしらぬそのくちをしさ、
逃げまどひ、泣きてかへりぬ。

母上に賜びし桃の實、
われひとり食べむものを。

胡瓜

そのにほひなどか忘れむ。
ほのじろき胡瓜の花よ。

そのひと日、かけにかくれて
わが見てし胡瓜の花よ。

かの日には歌舞伎見るとて
父上にせがみまつりき、
そがために小さき兄弟
日をひと日家を追はれき。

弟は水の邊に立ち、
聲あけて泣きもいでしか。
われははた胡瓜の棚に
身をひそめすすり泣きしき。

かくてしも幼き涙

頬にくゆるしばしがほどぞ、
珍なる新らしき香に
うち噎び、なべて忘れつ。

さあれ、かの痛らき父の眼
たまたまに思ひいでつつ、
日をひと日、泣きも疲れて
數へ見てし胡瓜の花よ。

源平將棋

春の夜の源平將棋、
あはれなほ思ひぞ出づる。
ただ一夜あてにをさなく

いのかにも見てしばかりに。

その君はわれとおなじく
かぶら髪、ゆめの眸して
紅の玉をとらし
われは白、かくて對ひぬ。

春の夜の源平將棋、
そののちは露だにあはず、
名も知らず、われも長じて
二十歳の春にあへれど。

などかまた忘れはつべき。
紅のとらす玉ゆゑ、

いとけなく勝たせまつりし
そのかみの春の夜のゆめ。

朝

日は皐月、

小野のしら花、

鈴すず状じょうに咲きて夜あけぬ。

静しずなり、ひとり坐れば。

静しずなり、ひとり坐れば。――

くるる戸の

きしるにほひも。

君は早や、

麥の青みを――

鈴鳴らし朝の禱いのちりに、――

白しろぎぬに摺りもこそゆけ、

白しろぎぬに摺りもこそゆけ、

野の寺へ。――

かくも思ひぬ。

ああしばし、

星のうすれに、

髪なぶる風のなよびも、

水鳥のほのしらべも、

水鳥のほのしらべも、

われききぬ。

きみがこころも。

人生

野の阜月、空ものどかに、
白き雲ゆるかにわたり、
畑にはからし花咲き、
雲雀また妙にうかびぬ。

南向く白き酒倉、

そがもとにわれはその日も、
職立つ野の末ながめ
ゆめのごとむきし佛手柑。

かすかにも囃子はきこえ、

笛まじり風もにほへど、

父のまたゆるしたまはぬ
歌舞伎見をなにかすべき。

かくてまたすすり泣きつつ、

實をひとり吸ひもてゆけば
酸ゆかりき。あはれ、それより
われ世をば厭ひそめにき。

青き 甕

青き甕にはよくコレラ患者の死骸を入れたり、これらを幾個とな
く擔ぎゆきし日のいかに恐ろしかりしよ、七歳の夏なりけむ。

「青甕ぞ。」——街衢に聲す。

大道に人かけ絶えて
 早や七日、溝に血も饑え、
 悪蟲の羽風の熱さ。
 日も眞夏、火の天爛れ、
 雲燥りぬ。——大家の店に、
 人々は墓なる恐怖。
 香くすべ、青う寝そべり、
 煙管とる肱もたゆげに、
 蛇のごと眼のみ光りぬ。

『青甕ぞ。』——今こそ家族、
 『聲す。』『聽け。』『血糊の足音。』
 『何もなし。』——やがて寂莫。——
 杪ならず、荷擔夫一人、

次に甕、（これこそ死骸）
 また男。——がらす戸透かし
 つと映る刹那——眞青に
 甕なるが我を睨みぬ。
 父なりき。——（父は座にあり。）——
 ひとつ眼の呪咀の光。

『青甕ぞ。』——日もこそ青め、
 言葉なし。——蛇のとぐるを
 香匂ひぬ、苦熱の息吹。
 また過ぎぬ、ひひら笑ひぬ。
 母なりき。——（母も座にあり。）——
 がらす戸の冷たき皺み。
 やがてまた一列、——あなや、

我なりき。——青き小甕に、
歎歎りつつ黒き血吐くと。
刹那見ぬ、地獄の恐怖。

赤足袋

肩越しにうかゞふ子らに、
沙彌が眼はなべて光りぬ。——
日の一時、水無月まなか、
大なる鏡鉞ひびき、
亡者めく人びとあまた
香爐焚き、棺衣めぐり、
群れつどひ、両手あはせぬ。

長老は拂子しづしづ
誦經いま、咽び音まじり、
廣澄みぬ。——七歳の我は
興なさに、此時膝に
眼うつせば、紗の服がくれ、
だぶだぶの赤足袋。——をかし、
髯づらに涙ながれき。

『南無阿彌陀』——沙彌が眼光り、
拂子ゆれ、風湧く刹那、
一齊に念佛起り、
老若も、男女も、子らも、
赤足袋も、咽ぶと見れば、
層高の銅拍子、——あなや、

われ堪へず、——笑ひくづれき。

九六〇

大人とならばいかにせん

祭まつりの日、美しくしき人も來ましき。
稚き女の友もあつまりぬ。
あるはまた馬うまに騎のりりて
物むつかしき武士ぶしの爺おやも來ましき。

樂しかる祭なれども、
われはただつねにおそれぬ。

祭まつりの日、むつかしき言ことのかずかず
挨拶あいさつひ、父は笑ましき、

禿頭かぶつするするとかきあけながら——
われもまた爲せではかなはじ、かのことも大人おとなとならば。
樂しかる祭まつりなれども、
われはただつねにおそれぬ。

あかき林檎

いと紅き林檎の實をば
明日あすこそはあたへむといふ。
さはあれど、女の友は
何時いつもそを持ちてなかりき。
いと紅き林檎の實をば
明日あすこそはあたへむといふ。

九六一

恐怖

乳母なれどわれは恐れき。
夜も晝も『和子よ。』と歎歎り、
『骨だちぬ。』われを『死なば』と、
母よりも激しき愛に、
抱擁めつ。——『かなし。』とばかり。

乳母なれど、せちに恐れき。
執着よ、臨終の刹那、
涙なき老の眼は、
母よりも激しき愛に、
我みつめ——青く白みき。

乳母なれど、いまも恐れぬ。
疑問に悲しみ亂れ、
わが泣けば馴寄り水如し、
『吾子よ、吾ぞ。』(夜は二時ならし。)
『汝が母』と——青き顔しぬ。

乳母の墓

あかあかと夕日てらしぬ。
そのなかに乳母と童と
をかしげに墓をながめぬ。
その墓はなほ新らしく、

畑中の南瓜の花に
もの甘くしめりにほひき。

乳母はいふ、『こはわが墓』と、
『われ死なばここに彫りたる
おのが名の下闇にこそ。』

三歳のち、乳母はみまかり、
そのごともここに埋もれぬ。
さなり、はや古びし墓に。

あかあかと夕日さす野に、
南瓜花をかしき見れば
いまもはた涙ながるる。

性の芽生

母

母の乳は枇杷より温ぬるく
柚子より甘し。

唇くちびるつけて我が吸へば
擦こすゆし、痒かゆゆし、味あじよし。

片手もて乳房ちち壓し
もてあそび、頬ほを寄すれ。

肌かわさはりやはらかに
抱かかかれて日も足らず。

いとほしと、これをこそ
いふものか、ただ戀し。

母の乳を吸ふごとに
わがこころすすろぎぬ。

母はわが凡て。

石竹の思ひ出

なにゆるゑに人々ひとびとの笑ひしか。
われは知らず、
え知る筈はずなし、

そは稚き三歳のむかしなれば。

暑き日なりき。

物音もなき夏の日のあかるき眞晝なりき。
息ぐるしく、珍らしく、何事か意味ありけなる。

誰が家か、われは知らず。

われはただ老爺の張れる黄色かりし提燈を知る。
目のわろき老婆の土間に割きつつある
青き液出す小さな貝類のほひを知る。

わが惱ましき晝寢の夢よりさめたるとき、

ふくらなる或る女の兩手は
弾機のごとも慌てたる熱き力もて

かき抱き、光れる縁側へと連れゆきぬ
花ありき、赤き小さき花、石竹の花。

無邪氣なる放尿……

幼兒は静ころなく凝視めつつあり。

赤き赤き石竹の花は痛きまでその瞳にうつり、
何ものか、背後にて擦ゆし、繪艸紙の古ぼけし手觸にや。

なにごとの可笑さぞ。

数多の若き漁夫と着物つけぬ女との集まりて、
珍らしく、恐ろしきもの、
そを見むと無益にも靈動かす。

柔かき乳房もて頭を壓され、

幼児は怪しげなる何物をか感じたり。
何時までも何時までも、五月蠅く、なつかしく、やるせ
なく、

身をすりつけて女は呼吸す、
その汗の臭の強さ、くるしき、せつなさ、
恐ろしき何やらむ背後にぞ居れ。

なにゆるゑに人々の笑ひつる。

われは知らず、
え知る筈なし、

そは稚き三歳の日のむかしなれば。

暑き日なりき、

物音もなき鹹河の傍のあかるき眞晝なりき。

蒸すが如き幼年の恐怖より
尿しつ……われのただ凝視めてありし
赤き花、小さき花、目に痛き石竹の花。

幽 靈

覺醒むれば

しんしんと水の音近し、
わが乳母の心音かそは

夜は暗く……耳鳴す……青葱畑……

いつこにか夜芝居の篠きこゆ、本釣きこゆ、
恐ろしき道すがらその肩にかぢりつき、
手をのべてからめども、首すぢは『お岩』のごとく、

髪のけの青かりしかな、
蕙の香の陸さへしつ。

月もなく、星もなし、
然れども或るものは戯れのごと
黄なる毛のほひして走り過ぐ……
わが乳母の魂ざりし聲、
ゆくりなく、眼に入りし
蒼き火の光なき幻影。

銀色の憂鬱に、夜は青く輝きわたり、
しんしんと水の音冴えつ。
倒れしは、わが乳母か、息絶えしその背より
ふと見れば
幽霊は冷やかにほほゑみぬ。——あなやそは乳母。

願人坊

雪のふる夜の倉見れば
願人坊を思ひ出す。
願人坊は赤頭巾、
目も鼻もなく、眞白な
のつべらぼんの赤頭巾。

「ちよぼくれちよんがら、そもそもわつちが
のつべらぼんのすつべらぼん、すつべらぼんののつべら
ぼんの、
坊主になつたる所謂因縁きいてもくんねへ、
しかも十四のその春はじめて」……

踊り出したる悪玉が
願人坊の赤頭巾。

かの雪の夜の酒宴に、
我が顔へしは恐ろしきあるものの面、「色のいの字の」
白き道化がひと踊り………」

乳母の背なかに目を伏せて
恐れながらにさし覗き、
淫らがましき身振をば幽かにこころ疑ひぬ、
なんとなけれどおもしろく。

「お松さんにお竹さん、椎茸さんに干瓢さんと………」
手練手管が何ごとか知らぬその日の赤頭巾、

悪玉踊の變化もの。

雪のふる夜の倉見れば
願人坊を思ひ出す。
雪のふる夜に、戯けしは
酒屋男の尻かろの踊り上手のそれならで、
最も醜く美しく饑ゑてひそめる仇敵、
おのが身の淫ごころと知るや知らずや。

あかんぼ

昨日うまれたあかんぼを、
その眼を、指を、ちんぼこを、
眞夏眞晝の醜さに

憎さも憎く睨む時。

何かうしろに来る音にはつと恐れてわななきぬ。

『そのあかんぼを食べたし。』と黒い女猫がそつと寄る。

ロンドン

夏の日向にしをれゆく
ロンドン草の花見れば
暑き砂地にはねかへる
蟲のさけびの厭はしや。

かつはさみしき唇に
カステラの粉をあつるとき、
ひとりとくとくとく乳ねぶる
あかんぼの頭にくらしや。

夏の日向にしをれゆく
ロンドン草よ、わがうれひ。

松葉牡丹のことをわが地方にてロンドンと呼びならはしぬ。その韻いままもわすれず。

接吻

臭のふかき女きて
身體も熱くすりよりぬ。

そのときそばの車百合
 赤く逆上せて、きらきら
 蜻蛉動かす、風吹かず。
 後退ざりつつ恐るれば、
 汗ばみし手はまた強く
 つと抱きあけて接吻けぬ。
 くるしさ、つらさ、なつかしさ、
 草は萎れて、きりぎりす
 暑き夕日にはねかへる。

汽車のほひ

汽車が来た、——釣鐘草のそばに、
 何時も羽蟻が飛び、

黄色い日があたる。

JOHN は母上と人力車に、——
 頭のうへのシグナルがカタリと下る。面白いな。

もうと啼く牛のこゑ、
 停車場の方に白い夏服が光り、
 激しい大麥の臭のなかを
 汽車が来る……真黒な鐵の汗の
 静まらぬとどろき、とどろき、とどろき……

汽車が奔る……真面目な兩の眼玉から
 向日葵見たいに夕日を照りかへし、
 焦れつたいやうな、泣くやうな、變に熱い嘘を吹きつけ
 る。

油じみた皮膚のお化の
西洋のとどろき、とどろき、とどろき、とどろき、とどろき……

汽車が消ゆる……ほつと息をして
釣鐘草が汗をたらし、
生れ變つたやうな日光のなかに、
停つた人力車が動き出すと、
赤い手をしたシグナルがカタリと上る。面白いな。

ど ん ぐ り

どんぐりの實の夜もすがら
落ちて音するしをらしさ、
君が乳房に耳あてて

一夜ねむればかの池に。

どんぐりの實はかずしれず
水の面に唇つけぬ
お銀小銀のはなしより
どんぐりの實はわがゆめに。

どんぐりの實のおのづから
熟れてなけくや、めづらしく、
祭物見の前の夜を
二人ねむれば、その胸に。

どんぐりの實のなつかしく
落ちてなけけば、薄あかり、

かゝる寢息のひまびまや、
どんぐりの實は池水に。

赤い木太刀

赤い木太刀をかつぎつつ、
JOHN はしくしく泣いてゆく、
水天宮のお祭が
なぜにこんなになしがる。

悲しいことはなけれども、
行儀ただしく、人なみに
御輿のあとに従へば、
金の小鳥のヒラヒラが

なぜか、こころをそそのかす。

街は五月の入日どき、
覗き眼鏡がとりどりに
店をひろぐるそのなかを、
赤い木太刀をかつぎつつ、
JOHN はしくしく泣いてゆく。

糸車

糸車、糸車、しづかにふかき手のつむぎ
その糸車やはらかにめぐる夕ぞわりなけれ。
金と赤との南瓜のふたつ轉がる板の間に、
『共同醫館』の板の間に、

ひとり坐りし留守番のその媪こそさみしけれ。

九八四

耳もきこえず、目も見えず、かくて五月となりぬれば、
微かに匂ふ綿くづのそのほこりこそゆかしけれ。
硝子戸棚に白骨のひとり立てるも珍らかに、
水路のほとり月光の斜に射すもしをらしや。
糸車、糸車、しづかに黙す手の紡ぎ、
その物思やはらかにめぐる夕ぞわりなけれ。

水面

ゆふべとなればちりかか
柳の花粉のうすあかり、
そのかけに透く水面こそ

けふも * Oneg の眼つきすれ。

またなく病めるおももちの
君がここにあまゆれば、
渦のひとつは色變えて
生贍取の眼を見せつ。

恐れてまたも凝視むれば
銀の * Benjo のいろとなり、
ハイモニカとなり、權となり、
またもかの兒の眼となりぬ。

柳の花のちりかか
樋のほとりのやんま釣り、

ひとりつかれて水面に
くあまゆるわがこころ。

Orig. 良家の娘、小さき令嬢。柳河語。

Benjo. 肌薄く、紅く青き銀光を放つ魚、小さし。同上。

毛 蟲

毛蟲、毛蟲、青い毛蟲、
そなたは何處へ匍ふてゆく、
夏の日くれの磨硝子
薄く曇れる冷たさに
幽に幽にその腹部の透いて傳はる美しさ。
外の光のさみしいか、
内の小笛のこひしいか、

毛蟲、毛蟲、青い毛蟲、
そなたはひとり何處へゆく。

かりそめのなやみ

ゆく春のかりそめの
びいどろの薄き曇に
肉桂水を入れて欲し、
カステラの欲し。

鉛の汽車の玩具は

紫の目に痛し。

銀紙を透かせば黒し、

わが乳母の乳くびも汚なし。

硝子戸に日の射せば
ザボンの白い花ちりかかり、
なんとなう温かうして心空腹じ。

カステラをふくみつつ、その黄いろなる、
われはかの君をぞ思ふ、
柔かき手のひらのなつかし。
小さきその肩のなつかし。

かかる日に、かかる日に、
からし菜の果をとりて泣く人の
その肩に手を置きて、
手を置きて、ただ何となく寄り添ひてまし。

道ぐさ

芝くさのほひに
夏の日光り、
幼年のところに
* Wasiwasi 啼く。

作にはぐれて
うつとりと、
雪駄ひきする
真晝どき。

汗ばみし手に

羽蟲きて、
赤き腹部すり、また、消ゆる、
藍色の眼の美しくしや。

つかず離れぬ
その恐怖、
たらたら坂を
またのぼる。

芝くさのにほひに

夏の日光り、

幼年のところに

Wasiwasi 啼く。

* 油蟬の方言

螢

夏の日なかのヂキタリス、
釣鐘状に汗つけて
光るころもいとほしや。
またその陰影にひそみゆく
螢のむしのしをらしや。

そなたの首は骨牌の
赤いヂヤツクの帽子かな、
光るともなきその尻は
感冒のこちにほの青し、
しをれはてたる幽霊か。

ほんに内氣な螢むし、
嗅げば不思議にむしあつく、
甘い藥液の香も濕る、
晝のつかれのしをらしや。
白い日なかのチキタリス。

青い とんぼ

青い とんぼの眼を見れば
緑の、銀の、エメロウド、
青い とんぼの薄き翅
燈心草の穂に光る。

青い とんぼの飛びゆくは
魔法つかひの手練かな。
青い とんぼを捕ふれば
女役者の肌さはり。

青い とんぼの奇麗さは
手に觸るすら恐ろしく、
青い とんぼの落つきは
眼にねたきまで憎々し。

青い とんぼをきりきりと
夏の雪駄で踏みつぶす。

猫

夏の日なかに青き猫
かろく擁いだげば手はかゆく、
毛みじろの動うごげばわがこころ
感かぜ冒のこころに身も熱ほる。

魔法つかひか、金きんの眼の
ふかく息する恐ろしさ、
投なげて落おせばふうわりと、
汗あせの緑のただ光る。

かかる日なかにあるものの

見みえぬけはひぞひそむなれ。
皮かわ膚かのすべてを耳みみにして
大おほ麥むぎの香かほになに狙ねらふ。

夏の日なかの青き猫
頬ほにすりつけて、美しくしき、
ふかく、ゆかしく、おそろしき
むしろ死しぬまで抱だきしむる。

おたまじやくし

粘ねりついたり、もつれたり、
青い針はりめく藻ものなかに

黒く、かなしく、生いきと。

死んだ蛙が生じろく
仰向きて浮く水の上、

銀の光が一面に
鐘の「刹那」の音のごとく。

おたまじやくしの泣き笑ひ

こゑも得立てね、ちろちろと、

けふも痛そに尾を弾く、

黒く、かなしく、生いきと。

おたまじやくしか、わがこころ。

銀のやんま

二人ある日はやうもなき

銀のやんまも飛び去らず。

君の歩みて去りしとき

銀のやんまもまた去りぬ。

銀のやんまのろくでなし。

にくしみ

青く黄の斑のうつくしき

やはらかき翅の蝶を、

ピンか、紅玉か、ただひとつ、

肩に星ある蝶を、
強ひてその手に渡せども
取らぬ君ゆゑ目もうちぬ。
夏の日なかのにくしみに、
泣かぬ君ゆゑその唇に、
青く、黄の粉の恐ろしき
にくらしき翅をすりつくる。

白粉花

おしろい花の黒きたね
爪を入れるれば粉のちりぬ。
幼なごころのにくしみは
君の來たらぬつかのまか。

おしろい花の黄と赤、
爪を入れるれば粉のちりぬ。

水蟲の列

朽ちた小舟の舟べりに
赤う列ゆく水蟲よ、
そつと觸ればかつ消えて、
またも放せば光りゆく。

いさかひのあと

紅いシャツ着てたたずめる
TONKA JOHNこそかなしけれ。

白鳳仙花のはなさける
夏の日なかにただひとり。

手にて觸ればそのたねは
莢をはちきて飛び去りぬ。
毛蟲に針をつき刺せば
青い液出て地ににじむ。

源四郎爺は、目のうすき、
魚かついでゆき過ぎぬ、
彼の禿けたる頭より
われを笑へるものぞあれ。
憎き街かな、風の來て

合歡の木をば吹くときは、
さあれ、かなしく身をそそる。
君にそむきしわがこころ。

爪 紅

いさかひしたるその日より
爪紅の花さきにけり、
FINKA ONGOの指さきに
さびしと夏のにじむべく。

Finka ongo. 小さき合歡。柳河語。

夕 日

赤い夕日、――

まるで葡萄酒のやうに。

漁師原に鶏頭が咲き、

街には虎刺拉が流行つてゐる。

濁つた水に

土臭い鮒がふよつき、

酒倉へは巫女が来た、

腐敗止のまじなひに。

こんな日がつづいて

従姉は氣が狂つた、

片おもひの鶏頭、――

あれ、歌ふ聲がきこえる。

恐ろしい午後、
なにかしら畑で泣いてると、
毛のついた紫蘇までが
いらいらと眼に痛い。……

赤い夕日、――

まるで葡萄酒のやうに。

何かの蟲がちろりと

鳴いたと思つたら死んでゐた。

紙きり蟲

紙きり蟲よ、きりきりと、

薄い薄葉をひとすぢに。
何時も冷たい指さきの
青い疵さへ、その身さへ、
遊びつかれて見て泣かす、
君が狂氣のしをらしや。
紙きり蟲よ、きりきりと
薄い薄葉をひとすぢに。

わが部屋

わが部屋にわが部屋に
長崎の繪はかかりたり、
路のべに尿する和蘭人の――
金紙の鎧もあり、

赤き赤きアラビヤナイトもあり。

わが部屋にわが部屋に
はづかしき幼児の
ゆめもあり、
かなしみもあり、
かつはかの小さき君の
なつかしき足音もあり。

わが部屋に、わが部屋に
奇異なる事ありき、
かなしきはそれのみか、
その日より戸はあかず……、
せんなしや、わが夢も、足音も、
赤き版古も。

わが部屋に、わが部屋に、
弊私的里の従姉きて
蒼白く泣けるあり。
誰なれば誰なればかの頭
醫者のごと寄り添ひて眠るやらむ。
わが部屋にわが部屋に、
ほこらしく、さは二人。

監獄のあと

廢れたる監獄に
鶏頭さけり、

夕日の照ればかなしげに
頸を顛はす。

そのなかにきのふまで
白痴の乞食
髪くさき女の甘き恐怖もて
風とりつる。

ある日、血は鶏頭の
半開の花にちり、
毛の黄なる病犬の
ひとり光りぬ。

そののちはなにも見ず、

かの犬も殺されて
しどけなき長雨の
ふりつづく月はきぬ。

廢れたる監獄に
鶏頭さけり、
夕日のてればかなしげに
頸を顛はす。

午後

わが友よ、
けふもまた骨牌の遊びにや耽らまし、
かの轉がされし酒桶のなかに入りて、

風味よき日光を浴び、
絶えず白きザボンの花のちるをながめ、
肌さはりよきかの酒の木香のなかに日くるるまで、
わが友よ、
けふもまた舶來のリイダアをわれらひらき、
珍らしき節つけて『鶯鳥はガツグガツグ』とぞ、そぞろにも
讀み入りてまし。

アラビアンナイト物語

鳴いそな鳴いそ春の鳥。
菱の咲く夏のはじめの水路から
銀が、みどりが………顛へ來て、
本の活字に目が泌みる。

鳴いそな鳴いそ春の鳥。
赤い表紙の手さはりが
狂氣するほどなつかしく
けふも寝てゆく舟の上。

鳴いそな鳴いそ春の鳥。
葡萄色した酒ぶくろ、
干しにゆく日の午後ひるごきに
しんみりと鳴る、櫓の音が……………

鳴いそな鳴いそ春の鳥。
ネルのにほひか、酒の香か、
舟はゆくゆく、TONKA JOHN.

魔法つかひが金の夢。

註 酒 搾り了れるあとの濡りたる酒の袋を干しにとて、日ごとにわが家の
小舟は街の水路を上りて柳河の公園の芝生へとゆく。わが幼時の空想は
またこの小舟の上にて思ふさまその可憐なる翅をばかいひろげたり。

敵

いづこにか敵のゐて、
敵のゐてかくるごとし、
酒倉のかけをゆく日も、
街の問屋に
銀紙買ひに行くときも、
うつし繪を手の甲に押し、
手の甲に押し、

夕日の水路見るときも、
ただひとりさまよふ街の
いづこにか敵のゐて
つけねらふ、つけねらふ、静ころなく。

たそがれどき

たそがれどきはけうとやな、
傀儡師の手に踊る
華魁の首生じろく、
かつくかつくと目が動く……
たそがれどきはけうとやな、
瀉に墮した黒猫の

足音もなく歸るころ、
人霊もゆく、家の上を。

たそがれどきはけうとやな、
馬に載せたる鮪の腹
薄く光つて滅え去れば、
店の時計がチンと鳴る。

たそがれどきはけうとやな、
口さへ暮るれば、そつと来て
生膽取の青き眼が
泣く兒欲しやと戸を覗く……

たそがれどきはけうとやな。

赤き椿

わが眼に赤き藪椿。
外の空氣にあかあかと、
音なく光り、はた、落つる。
いま死にのぞむわが乳母の
かなしき眼つき……藪椿。

醜^{みにく}き面^{おもて}をゆがめつつ
家畜^{かちく}のごとく、はた泣くは、
わが手を執^とるは、吸^すひつくは、
憎^{にく}く、汚^{きた}なく恐^{おそ}ろしき
最愛^{さいあい}の手か、たましひか。

かの眼^めに赤き藪椿
小さき頭^{かぶ}悩^{なや}みにあかあかと、
音なく光り、はた、落つる。

二人

夏の日の午後……
瓦^わには紫^{むら}の
薊^{あざ}ひとりかどやき、
そことなしに雲^{くも}が浮^うぶ。

酒倉^{さか}の壁^{かべ}は
二階^{にがい}の女郎^{ぢやうらう}屋^やにてりかへし、

痛いやうに針が動く、
印度更紗のさくろの實。

暑い日だつた。
黙つて縫ふ女の髪が、
その汗が、溜息が、
奇異な切なさが……

悩ましいひるすぎ、
人形の首はころがり、
黒い蝶の断れた翅、
その粉の光る美しくしさ怪しさ。

たつた二人、……

何か知らぬところに
九歳の兒が顛へて
そつと閉めた部屋の戸。

たはむれ

菖蒲の花の紫は
わが見物のころかな
かつは家鴨の尻がろに
水へ滑るは戯けたる
道化芝居の女かな。
軍鶏のにくきは定九郎か
與一兵衛には何よけむ。
カステラいろの雛らは

かの山良さんのとりまきか、
 びよびよびよとよく歌ふ。
 禿けた金茶の南瓜は
 九太夫どのか、伴内か、
 青い蜻蛉の息絶えし
 おかると名づけ水くれむ。
 銀の力彌の肩衣は
 いちはつぐさか、——雨がへる
 びよいと飛び出た宙がへり、
 青い捕手の幕切は
 ええなんとせう、夜の雨に。

苧麥のほひ

あかい日の照る苧麥に
 そつと眠れば人のこゑ。
 鳥の鳴くよに、戯歌るよに、
 銀の蝨斯の弾くよに。

ひとのすがたは見えねども、
 なにが悲しき、そはそはと、
 黄ろい羽蟲がやはらかに
 解けて纏れて戯歌るこゑ。

あかい日のてる苧麥に、
 男かへせし美代はまた
 驚追ひつつその卵
 そつと盗るなり前掛に。

青い鳥

1010

せんだんの葉越しに、
青い鳥が鳴いた。

『たつた、ひとつ知ってるよ。』つて、
さもさもうれしさうに、かなしさうに。

日の光に顔へながら、

今日も今日も鳴いてゐる。

『棄兒の棄兒の FONKA JOHN
眞實のお母さんが、外にある。』

註 わが幼き時の恐ろしき疑問のひとつは、わが母は眞にわが母なりやといふにありき。ある人は汝は池のなかより生れたりと云ひ、ある人は紅き

果の熟る木の枝に籠とゞもに下げられて泣きてゐたりしなど眞しやかに語りきかしぬ。小さき頭腦のこれが爲めに少からず脅かされしこと今に忘れず。

1011

TONKA JOHNの悲哀

春のめざめ

JOHN, JOHN, TONKA JOHN,

*油屋の JOHN, 酒屋の JOHN, 古問屋の JOHN,
我儘で派美好きな YOKARAKA JOHN.
"SORI-BATTEN!"南風が吹けば菜の花畑のあかるい空に、
真赤な真赤な朱のやうな * MEN が
大きな朱の凧が自家から揚る。
"SORI-BATTEN!"

夏の日が酒倉の冷たい白壁に照りつけ、

ちゆうまえんだに天鷲絨葵の咲く
六月が来た、くちなはが堀をはしる。
"ORI BATTEN!"秋のお祭がすみ、立つてゆく博多二〇加のあとから
戦のやうな酒つくりがはじまる。
金色の口あたりのよい日本酒。
"SORI-BATTEN!"麴室の長い冬のむしあつさ、
そのなかに黒い小猫を抱いて忍び込み、
皆して骨牌をひく、黄色い女王の感じ。
"SORI-BATTEN!"

女の子とも、飛んだり跳ねたり、遊びまはり、
今度は熱病のやうに読み耽る、

ああ、ああ、舶來のリイダアの新しい版畫の手觸り。
"SORI-BATTEN!"

FONKA JOHNの不思議な本能の世界が
魔法と、長崎と、和蘭陀の風車に
思ふさま張りつめる……食慾が躍る。

"SORI-BATTEN!"

父上、母上、さうして小さく JOHN と GONSHAN
痛いほど香ひだす皮膚から、靈魂の恐怖から、
眞赤に光つて暮れる FONKA JOHN の十三歳。

"SORI-BATTEN!" "SORI-BATTEN!"

1. 油屋、酒屋、古問屋。油屋はわが家の屋號にて、そのむかし
油を霧ぎしといふにもあらず、酒造のかたはら、舊くより魚類
及穀物の問屋を業としたるが故に古問屋と呼びならはしぬ。
2. Yokaraka John. 善良なる兒、柳河語。
3. 朱の Men. 朱色人面の風、その大きなは直径十尺を超ゆ。
その他は概ね和蘭風の菱形のものを用ふ。
4. Gonshan. 良家の令嬢、柳河語。

秘 密

桑の果の赤きものかけより、午後の水面は光り
奇異なる新らしき生活に蛙らはとんぼがへりす。
ねばれる蛇の卵見ゆ、かつは臭のくさければ

*ガメノシユブタケ擧めつつ毛根を水に顛はす。...

かなたこなたに咲く花は水ヒアシンス、
その紫に蜻蛉ゐてなにか凝視むれ、一心に。

そのとき、われは桑の果の赤きかけより、

祭日の太鼓の囀子厭はしく、わが外の世をば隙見しぬ。

かの銀箔の歎きこそ魔法つかひの吐息なれ、

皮膚の痛みにえも鳴かぬ蛙の、あはれ、宙がへり。

かかる日にこそわが父母を、かかる日にこそ、

眞實ならずと来て告げむ、*OMIKAの婆に心おびゆる。

1. Omikaの婆。Omikaと呼ぶ狂氣の老婆なり。つれにわが酒

介に来てこの酒倉わがものぞ、この酒もわがものぞ、Tonka
Tonka 汝もわがものぞ。汝の父母と懐かしむ彼やつらは全く赤
の他人にてわれこそは汝が母ぞよとわれを見ては脅かしぬ。

2. ガメノシユブタケ。水草の一種、方言。

太陽

太陽は祭日の喇叭のごとく、

放たれし手品つかひの鳩のごとく、

或は閃めく薬湯のフラフのごとく、

なつかしきアンチピリンの粉のごとし。

太陽は紅く、また、みどりに、

幼年の手に回す萬華鏡のなかに光り、

穀物の花にむせび、

薄きレンズを透かしてわが怪しき函のそこに、
微かなる幻燈のゆめのごとく、また街の射影をうつす。

太陽はまた合歡の木をねむらせ、

やさしきたんぽぽを吹きおくり、

銀のハーモニカに、秋の收穫のほひに、
或は青き蟾蜍の肌に觸れがたき痛みをちらす。

太陽は枯草のほめきに、玉蜀黍の風味に、

優しき姉のさまして勞れども、

太陽は太陽は
新らしき少年の恐怖にぞ——身と靈との變りゆく秘密に
ぞ、

あまりにも眩ゆき判官のまなざしをもて
ああ、ああ、太陽はかにかくに凝視めつつ脅かす。

夜

夜は黒……銀箔の裏面の黒。

滑らかな瀉海の黒、

さうして芝居の下幕の黒、

幽霊の髪の毛の黒。

夜は黒……ぬるぬると蛇の目が光り、

おはぐろの臭のいやらしく、

千金丹の鞆がうるつき、

黒猫がふはりとあるく……夜は黒。

夜は黒……おそろしい、忍びやかな盗人の黒、
定九郎の蛇目傘、
誰だか頸すぢに觸るやうな、
力のない死螢の翅のやうな。

夜は黒……時計の數字の奇異な黒。

血潮のしたたる

生じろい鉄を持つて

生膽取のさしのぞく夜。

夜は黒……瞑つても瞑つても、

青い赤い無數の靈の落ちかかる夜。

耳鳴の底知れぬ夜。

暗い夜
ひとりぼつちの夜。
夜……夜……夜……

感 覺

わが身は感覺のシンフォニー、
眼は喇叭、
耳は鐘、
唇は笛、
鼻は胡弓。

その病める頬を投げいだせ、
たんぽぽの光りゆく草生に、

肌はゆるき三味線の
三の絲の手ざはり。

見よ、少年の秘密は

玉蟲のごとく、

赤と青との甲斐絹のごとく、

滑りかがやく官能のうらおもて。

その感覚を投げいだせ——

黒猫は眼を据ゑてたぶらかし、

酸漿は眞摺に孕み、

緑いろの太陽は酒倉に照る。

全神経を投げいだせ、

紫の金の蜥蜴のかなしみは
素肌をつけてはしりゆく、
いら草の葉に、葦の葉に。

げに、幻想のしたたりの
恐れと、をののきと、啜泣き、
匿しきれざる性のはづみを弾ねかへせ。
美しくしきわが夢の、笛の喇叭の春の曲。

晝のゆめ

酒倉の強き臭を嗅ぐときは

夏のさみしく、

油屋の黄なる搾木をきくときは

秋のかなしく、
少年の感じ易さは、怪しさは、
あはれ、ひねもす、
金文字の古き蘭書に耳をあて
黒猫の畫の瞳に見るごとく、
冬もゆめみぬ、ゆゑわかぬ春のシムフォニー。

朱欒のかげ

弟よ、
かかる日は喧嘩もしき。
紫蘇の葉のむらさきを、
葦をまた踏みにじりつつ、
われ打ちぬ、汝打ちぬ、
血のいづるまで、
柔かなる幼年の體の

こころよく、こそばゆく手に痛きまで。

豚小屋のうへにザボンの實黄にかがやき、
腐れたるものの香に日のとろむとき、
われはまた汝が首を擁きしめ、擁きしめ、
かぎりなき夕ぐれの味覺に耽る。

ふくれたるその頬をばつねるとき、
わが指はふたつなき諧樂を生み、
いと赤き血を見れば、泣聲のあふれ狂へば、
わがこころはなつかしくやるせなく戯れかなしむ。

思ひいづるそのかみの TYRANT.
狂ほしきその愉樂……

今もまた匂高き外光の中
 あかあかと二人して落すザボンよ。
 その庭のそのゆめの、かなしみのゆかしければぞ、
 弟よ、
 かかる日は喧嘩もしき。

幻燈のほひ

わが友よ、わが過ぎし少年の友よ、
 汝は知るや、なつかしき幻燈の夜を、
 ほの青きほの青き雪の夜景を、——
 水車しづかにすべり、霏々として綿雪のふる。
 ふりつもる異國の雪は陰影の雪、おもひでの雪。

いつしかと眼に滅えぬべきかなしみの映畫なれども、
 その夜には
 小さなる女の友の足のうら指につめたく、
 チクタクと薄き時計もふところに針を動かす……
 いとけなきわれらがゆめに絶間なくふりつもる雪。
 ふりつもる「時」、沈黙にうづもれて滅ゆる昨日よ。
 淡つけきわが初戀のかなしみにふる雪は薄荷の如く、
 水車しづかにすべり、ピエローは泣きてたどりぬ。
 ほの青きほの青き幻燈の雪の夜景に
 われはまた春をぞ思ふ、
 マンドリン音をひそめしそのあとの深き恐怖に、
 ふりつもる雪、ふりつもる雪、……ゆえわかぬ性の芽

生は

青猫の耳の顛へをわが膝に美しくしみつつ。

雨のふる日

わたしは思ひ出す。
 緑青いろの古ぼけた硝子戸棚を、
 そのなかに賣薬の版木と、硝石の臭と、……
 しとしとと雨のふる夕かた、
 濡れて歸る紺と赤との燕を。

しとしとと雨のふる夕かた、
 蛇目傘を斗に疊んで、
 正宗を買ひに來た年増の眼つき、……

無言つて量る……禿頭の番頭。

しとしとと雨のふる夕かた、
 巫子が來て振り鳴らす鈴……
 生鼠壁の徽に觸る外面の
 人靈の燐光。

わたしは思ひ出す。
 しとしとと雨のふる夕かた、
 又首を抜いて
 死なうとした母上の顔、
 ついついと鳴いてゐた紺と赤との燕を。

BALL

柚子の果が黄色く、
日があかるく、
さうして熱い BALL.

觸れ易いところの痛さ。
何がなしに
握りしむる BALL.
投げるとき、
やはらかな掌に
なつかしい汗が光り……

受けるとき、
しみじみと抱く音、
接吻……

日が赤く、
柚子の果が黄色く、
何處かで糸操りの車。

なつかしい少年のところに
圓い、軟かな BALL の
やるせなさ……

柚子の果が黄色く、
日があかるく、

さうして投げかはず BALL.

10E7

尿する和蘭陀人

尿する和蘭陀人……

あかい夕日が照り、路傍の菜園には
キヤベツの新らしい微風、
切通のかけから白い港のホテルが見える。

十月の夕景か、ぼうつと汽笛のきこゆる。
なつかしい長崎か、香港の入江か、
葡萄牙？ 佛蘭西？
そのさきを異人がゆく、女の赤い輕帽……

尿する和蘭陀人……

そなたは何を見てゐる、彎曲の路から、
斷層面の赤いてりかへしの下から、
前かがみに腰をかがめた、あちら向きの男よ。

わたしは何時も長閑な汝の頭上から、
瀟洒な外輪船の出でゆく油繪の夕日に魅せられる。
病氣のとき、ねむるとき、さうして一人で泣いてゐる時
ほんのしばらく立ちとまり、尿する和蘭陀人のところト

水中のをどり

色あかきるもりの腹のひとをどり、
水の痛さにひとをどり。

10E5

腹の赤さは血のごとく、
水の痛さは石炭酸を撒るごとし。

10月

時は水無月、日は眞晝、
るもりの小さきみなし兒は
尻尾もふらず、掌も開かず、
たつた、ふたつの眼を開けて
ついとかへりぬひとをどり……

風はつめたたく、山ふかく、
青い松葉が針のごと光りて落つるたまり水。

色あかきるもりの腹のひとをどり、
水の痛さにひとをどり。

怪しき思

われは探しぬ、色黒き天鷲絨の蝶、
日ごと夜ごとに針を執り、テレピンを執り、
かくて殺しぬ、突き刺しぬ、ちぎり、なすりぬ。
鬼百合の赤き花粉を嗅ぐときは
ひとり呪ひぬ、引き裂きぬ、噛みぬ、にじりぬ。
金文字の古き洋書の鞣皮
ああ、それすらも黒猫に爪をかかしつ。

われは愛しぬ、くるしみぬ……顔へ、おそれぬ。
怪しさは蠟のほのほの泣くごとく、
青き蝮のふたつなき觸覺のごと、

10月

われとわが身をひきつつみ、かつ、かきむしこ。
美しくしき少年のえもわかぬ性の憂鬱。

一〇四九

金縞の蜘蛛

ゆく春のあるかなきかの絲に載り、
身を滑らする金縞の蜘蛛。
雨ふれば濡れそぼち、
日のてれば光りかがやく金縞の蜘蛛。
その青き金縞の蜘蛛。

怪しくも美しくしき眼は
晝の年増の秘密をば見て見ぬふりにうち顔へ、
うら耻かしき少年の夢を見透かし、

明日死ぬるわが妹の命をかひたと凝視むる。

ゆく春のあるかなきかの絲に載り、
身を滑らする金縞の蜘蛛。
人來れば肢を縮め、
蟲來れば捕りて血を吸ふ金縞の蜘蛛。
ただ一日青く光れる金縞の蜘蛛。

兄 弟

われらが素肌のさみしさよ、
細葱の青き畑に、
きりぎりすの鳴く眞晝に。

金いろの陽は
 匍ひありく弟の胸掛にてりかへし、
 そが兄の銀の小笛にてりかへし、
 護謨人形の鼻の尖りに弾ねかへる。

二人が眼に映るもの、
 いまだ酸ゆき梅の果、
 土龍のみち、
 晝の幽霊。

素肌にあそぶさびしさよ、
 冷めたき足の爪さきに畑の土は新しく、
 金の光は絶間なく鐵琴のごと弾ねかへる。

かくて、哀しき同胞は
 同じ血脈のかなしみのつき纏ふにか、呪ふにか、
 離れんとして、戯れつ……

みどり兒は怖々と、あちら向きつつ蟲を弾ね、
 兄は眞青の葱のさきしんと眺めて、唇あてて
 何かえわかぬ晝の曲、
 ひとり寥しく笛を吹く、銀の笛吹く、笛を吹く。

思

堀端に無花果みのり、
 その實いとあかくふくるる。

軟風の薄きところは
腫物にさはるがごとく。

夏はまた啞の水馬、
水面にただ弾くのみ。

誰か来て、するときナイフ
ぐざと實を突き刺せよかし。……

無花果は、ああ、わがゆめは、
今日もなほ赤くふくるる。

水銀の玉

初冬の朝間、鏡をそつと反して、
緑ふくその上に水銀の玉を載すれば
ちらちらとその玉のちろろめく、
指さきに觸るれば
ちらちらとちぎれて
せんなしや、ちろろめく、
捉へがたきその玉よ、小さき水銀の玉。
わかき日の、わかき日の、ちろろめく水銀の玉。

接吻後

怖ろしきその女、
なつかしきその夜。

翌の日は西よりのぼり、
恐怖と光にロンドン咲く。
血のごとく赤きロンドン。

われはただ路傍に俯し、
青ざめてじつと凝視めつ。

血のごとく赤きロンドン。

ロンドンに

弾ねかへる甲蟲

——ある事を知れるごとくに。

はねかへる甲蟲、

われはただロンドンに

言葉なく顔へて恐る。

——わが生の第一の接吻。

たんぼぼ

わが友は自刃したり、彼の血に染みたる亡骸はその場所より静かに
釣臺に載せられて、彼の家へかへりぬ。付き添ふもの一兩名、痛ま
しき夕日のなかにわれらはただたんぼぼの穂の毛を踏みゆきぬ、友、
時に年十九、名は中島鎮夫。

あかき血しほはたんぼぼの

ゆめの逕にしたたるや、

君がかなしき釣臺は

ひとり入日にゆられゆく……

あかき血しほはたんぼぼの
 黄なる蕾つぼみを染めてゆく。
 君がかなしき傷口きずぐちに
 春のほひも泌み入らむ……

あかき血しほはたんぼぼの
 晝のつかれに觸れてゆく、
 ふはふはと飛ぶたんぼぼの
 圓い穂の毛に、そよかせに……

あかき血しほはたんぼぼに、
 けふの入り日もたんぼぼに、
 絶えて聲なき釣臺つりだいの
 かげも、靈たましもたんぼぼに。

あかき血しほはたんぼぼの
 野邊をこまかに顛うたがへゆく。
 半ぼくづれし、なほ小さき、
 おもひおもひのそのゆめに。

あかき血しほはたんぼぼの
 かげのしめりにちりてゆく、
 君がかなしき傷口きずぐちに
 蟲の鳴く音ねも消え入らむ……

あかき血しほはたんぼぼの
 けふのなごりにしたたるや、
 君がかなしき釣臺つりだいは
 ひとり入日にゆられゆく……

柳河風俗詩

柳河

1060

もうし、もうし、柳河じや、
柳河じや。

銅の鳥居を見やしやんせ、
欄干橋を見やしやんせ。

(馭者は喇叭の音をやめて、
赤い夕日に手をかざす。)

薊の生えた

その家は、……

その家は、
古いむかしの遊女屋。

人も住はぬ遊女屋。

裏の BANKO にゐる人は、……
あれは隣の織娘。
織娘。

水に映つたそのかけは、……

そのかけは
母の形見の小手鞆を、

小手鞆を、

赤い毛糸でくくるのじや、
涙片手にくくるのじや。

もうし、もうし、旅のひと、

1061

旅のひと。

あれ、あの三味をきかしやんせ。
鳩の浮くのを見やしやんせ。

(馭者は喇叭の音をたてて、
あかい夕日の街に入る。)

夕焼、小焼、

明日天気になあれ。

* 縁臺、葡萄牙語の轉化か。

櫨の實

冬の日が灰いろの市街を染めた、
めづらしい黄ろさで、あかるく。――

濁川に、向ふ河岸の櫨の實に、
そのかけの朱印を押した材木の置場に。

枯れ枯れになつた葦の葉のささやき、……
潮の引く方へおとなしく家鴨がすべり、
饅を生けた魚籠のにほひも澱む。

古風な中二階の危ふさ、
欄干のそばに赤い果の萬年青を置いて、
柳河のしをらしい縫針の娘が
物指を頬にあてて考へてる。

何處かで三味線の懶い調子、――
疲れてゆく静かな思ひ出の街、

その裏の寂しい生活をさしのぞくやうに
「出の橋」の朽ちかかつた橋桁のうへから
*YORANBANSHOの花嫁が耻かしさうに眺めてゆく。

久し振りに雪のふりさうな空合から
氣まぐれな夕日がまたあかるくてりかへし、
櫛の實の卵いろに光る梢、
をりをり黒い鴉が留まつては消えてゆく。

*嫁入のあくる日盛装したる花嫁縮帽をかぶりて先に立ち、澁き紋服の姑
つきそひて、町内及近親の家庭を披露してあるく、風俗花やかなれども
匂いと古く雅びやかなり。

立 秋

柳河のたつたひとつの公園に

秋が来た。

古い懐月樓の三階へ

きりきりと繰り上ぐる氷水の硝子杯、

薄茶に、雪に、しらたま、

赤い雪洞も消えさうに。

柳河のたつたひとつの遊女屋に

薊が生え、

住む人もないがらんだうの三階から

きりきりと繰り下ぐる氷水の硝子杯、

お代りに、ラムネに、サイホン、

こぼろぎも欄干に。

柳河のたつたひとりの NOSKAI は
 しょんぼりと、
 月の出の橋の擬寶珠に手を凭せ、
 きりきりと音のかなしい薄あかり、
 けふもなほ水のながれに身を映す。

「氷、氷、氷……」

*遊女、方言。

水路

ほうつほうつと螢が飛ぶ……
 しとやかな柳河の水路を、
 定紋ちやうもんつけた古い提灯が、ほんやりと、

その舟の芝居もどりの家族かぞえを眠らす。

ほうつほうつと螢が飛ぶ……
 あるかない月の夜に鳴く蟲のこゑ、
 向ひあつた白壁の薄あかりに、
 何かしら燐のやうなおそれがむせぶ。

ほうつほうつと螢が飛ぶ……
 草のほひする低い土橋を、
 いくつか棹をかがめて通りすぎ、
 ひそひそと話してゐる町の方へ。

ほうつほうつと螢が飛ぶ……
 とある家のひたひたと光る汲水場くみずばに

ほんのり立つた女の素肌
何を見てゐるのか、ふけた夜のところに。

酒の徴

酒屋男は罽被ぶらんが不思議、ヨイヨイ、足で米といで手で流す、ホ
ンニサイバ手で流す。ヨイヨイ。

金の酒をつくるは
かなしき父のおもひで、
するどき歌をつくるは
その兒の赤き哀歡。

金の酒をつくるも、
するどき歌をつくるも、
よしや、また、わかき娘の
父知らぬ子供生むとも……

2
からしの花の實になる
春のすゑのさみしや。
酒をしぼる男の
肌さへもひとしほ。

3
酒袋を干すとして
ぺんぺん草をちらした。

散らしてもよかる、
その實となるもせんなし。

酩^とすり唄のこころは
わかき男の手にあり。
權をそろへてやんさの、
そなた戀しと鳴らせる。

5
麥の穂づらにさす日か、
酒屋男にさす日か、
軽ろく投げやるこころの
けふをかぎりのあひびき。

6
人の生るもとすら
知らぬ女子のところに、
誰が馴れ初めし、酒屋の
にほひか、麥のむせびか。

7
からしの花も實となり、
麥もそろそろ刈らるる。
かくしてはやも五月は
酒量^はる手にあふるる。

8

櫛の實採の來る日に
百舌啼き、人もなけきぬ、
酒をつくるは朝あけ、
君へかよふは日のくれ。

9

ところも日をも知らねど、
ゆるししひとのいとしさ、
その名もかほも知らねど、
ただ知る酒のうつり香。

10

足をそろへて磨ぐ米、
水にそろへて流す手、

わかいさびしいころの
歌をそろゆる朝あけ。

11

ひねりもちのほひは
わが知る人も知らじな。
頑くなひとゆるに
何時までひねるころぞ。

12

微かに消えゆくゆめあり、
酒のほひか、わが日か、
倉の二階にのぼりて
暮春をひとりかなしむ。

13 さかづきあまたならべて
いづれをそれと嘆かむ、
喇酒すなるころの、
せんなやわれも酔ひぬる。

14 その酒の、その色の、にほひの
口あたりのつよさよ。
おのがつくるかなしみに
15 囚られて泣くや、わかうど。

酒を醸すはわかうど、
心亂すもわかうど、
誰とも知れぬ、女の
その兒の父もわかうど。

16 ほのかに忘れがたきは
酒つくる日のをりふし、
ほのかに鳴いて消えさる
青い小鳥のころね。

17 酒屋の倉のひさしに
薊のくさの生ひたり、

その花さけば雨ふり、
その花ちれば日のてる。

計量機ケンカンに身を載せて
量るは夏のうれひか
薊の花を手にもつ
裸男の酒の香。

かなしきものは刺あり、
傷つき易きころの
しづかに泣けばよしなや、
酒にも微かほのほひぬ。

目さまし時計の鳴る夜に
かなしくひとり起きつつ
倉を巡回まはれば、つめたし、
月の光にさく花。

わが眠る倉ぐらのほとりに
青き光放つものあり、
螢あきか、酒か、いの寝ぬ
合歡あいかん木のうれひか。

倉の隅にさす日は
微かに光り消えゆく、
古りにし酒の香にすら、
人にはそれと知られず。

23
青葱とりてゆく子を
薄日の畑にながめて
しくしく痛むところに
酒をしぼればふる雪。

21
銀の釜に酒を湧かし、
金の釜に酒を冷やす

わかき日なれや、ほのかに
雪ふる、それも歎かじ。

25
夜ふけてかへるふしどに
かをるは酒か、もやしか、
酒屋男のところに
そそぐは雪か、みぞれか。

酒の精

『酒倉に入るなかれ、奥ふかく入るなかれ、弟よ、
そこには恐ろしき酒の精のひそめば』。
『兄上よ、そは小さき魔物ならめ、かの赤き三角帽の

西洋のお伽譚によく聞ける、おもしろき……。」
 『それは知らじ、然れどもかのわかき下婢にすら
 母上は妄りにゆくを許したまはず』
 『そは訝かしきかな、兄上、かの倉の内には
 力強き男らのあまたるれば恐ろしき筈なし』
 『けにさなり、然れども弟よ、母上は
 かのわかき下婢にすらされどなほゆるしたまはず。』
 酒倉に入るなかれ、奥ふかく入るなかれ、弟よ。』

紺屋のおろく

にくいあん畜生は紺屋のおろく、
 猫を擁へて夕日の濱を

知らぬ顔して、しやなしやなど。

にくいあん畜生は筑前しほり、
 華奢な指さき濃青に染めて、
 金の指輪もちらちらと。

にくいあん畜生が薄情な眼つき、
 黒の前掛、毛縞子か、セルか、
 博多帯しめ、からころと。

にくいあん畜生と、擁へた猫と、
 赤い入日にふとつまされて
 瀉に陥つて死ねばよい。ホンニ、ホンニ……

沈丁花

からりはたはた織る機は
佛蘭西機か、高機か、
ふつととだえたその窓に
守宮吸ひつき、日は赤し、
明り障子の沈丁花。

NOSKAI

堀の BANKO をかたよせて
なにをおもふぞ。花あやめ
かをるゆふべに、しんなりと

ひとり出て見る、花あやめ。

かきつばた

柳河の
古きながれのかきつばた、
晝は *ONOGI の手にかをり、
夜は萎れて
三味線の
細い吐息に泣きあかす。
(鳩のあたまに火が黠いた、
潜んだと思ふたらちよいと消えた。)
*良家の娘、柳河詰。

* AIYANの歌

いちらしや、
ちゆうまんだのゆふぐれに
蜘蛛が疲れて身をかくす、
ほんに薊の紫に
刺が光るぢやないかいな。

(*UNTEREGANのあん畜生はふたごころ。
わしやひとすぢに。)

- 1、下婢、兒守女、柳河語。
- 2、あの畜生？

曼珠沙華

GONSHAN. GONSHAN. 何處へゆく、
赤い、御墓の曼珠沙華
曼珠沙華、
けふも手折りに來たわいな。

GONSHAN. GONSHAN. 何本か、
地には七木、血のやうに、
血のやうに、
ちやうど、あの兒の年の數。

GONSHAN. GONSHAN. 氣をつけな。

ひとつ摘んでも、日は眞晝、
日は眞晝、
ひとつあとからまたひらく。

GONSHAN. GONSHAN. 何故泣くる。
何時まで取つても、曼珠沙華、
曼珠沙華、
恐や、赤しや、まだ七つ。

牡丹

ほんにの、薄情な牡丹がちりかかる。
風もない日に、のう、
紅い牡丹が、のうもし、ちりかかる。

ひらきつくした二人がなかか、
雨もふらいで、のうもし、ちりかかる。

氣まぐれ

逢ひけ來たち*
日の照り雨がふるかいな。

Odan mo iya, Tineo Sai
しやりむり別れたそのあとで、
未練な牡丹がまたひらく。

Odan mo iya, Tineo Sai

1、ちのは雅言のとやなり。來たの、來たんですつて。柳汀語。

2、Odan はわたしなり、Tineo は感嘆詞なり、全體の意味はあら駄だよ、

まあ。同上。

道ゆき

鱈と黒鯛と、
黒鯛と、

鱈と、のうえ、

肥前山をば、やんきのほい、けさ越えた、ばいとこずいずい、
後家と、按摩さんと、

按摩さんと、
後家と、のうえ、

蜜柑畑から、やんきのほい、昨夜逃げた、ばいとこずいずい。

目くばせ

門づけのみふし語りがいふことに

高麗鳥のあのこゑわいな。

晝の日なかに生れた赤子

埋めた和尚が一人あるぞえ。

古寺の高麗鳥のいふことに。

みふし語りのあの絃わいな。

今日も今日とて、かんしやくもちの

振られ男がそこいらに。

* 鄙びて粗末なる一種の琵琶を抱きて卑近なる物語を歌ひながらゆく盲日の門づけなり、地方特殊のものにてその歌ひものをみふしと云ふ。

あひびき

*きつねのろうそく見つけた、
 蘇鐵のかげの黒土に、
 黄いろなてうちん見つけた、
 晝も晝なかおどおどと、
 男かへしたそのあとで、
 お池のふちの黒土に、
 きつねのろうそく見つけた。
 *毒茸の一種、方言、色赤く黄し。

水門の水は

水門の水は
 兒をとろとろと渦をまく。
 酒屋男は

半切鳴らそと摺を取る。
 さても、けふ日のわがこころ
 りんきせうとてひとり寝る。

六 騎

御正忌参詣らんかん、
 情人が髪結うて待つとるばん。
 御正忌参詣らんかん、
 寺の夜あけの細道に。

鐘が鳴る鐘が鳴る。
 逢うて泣けとの鐘が鳴る。

*親鸞上人の御正忌なり。

10611

梅雨の晴れ間

廻せ、廻せ、水ぐるま、
けふの午から忠信が隈どり紅いしやつ面に
足どりがろく、手もかろく
狐六法踏みゆかむ花道の下、水ぐるま……

廻せ、廻せ、水ぐるま。
雨に濡れたる古むしろ、圓天井のその屋根に、
青い空透き、日の光
七寶のごときらきらと、化粧部屋にも笑ふなり。

廻せ、廻せ、水ぐるま、
梅雨の晴れ間の一日を、せめて楽しく浮かれよと
廻り舞臺も滑るなり、
水を汲み出せ、そしたの葱の畑のたまり水。

廻せ、廻せ、水ぐるま、
だんだら幕の黒と赤、すこしかかけてなつかしく
旅の女形もさし覗く、
水を汲み出せ、平土間の、田舎芝居の蕪畑。

廻せ、廻せ、水ぐるま、
はやも午から忠信が紅隈とつたしやつ面に
足どりがろく、手もかろく、
狐六法踏みゆかむ花道の下、水ぐるま、……

10612

蕪の葉

一〇九四

芝居小屋の土間のむしろに
いらいら泌みるものあり。
畑の土のほひか、
昨日の雨のしめりか
あかあかと阿波の鳴戸の巡禮が
泣けば……ころべば……蕪の葉が……

芝居小屋の土間のむしろに、
ちんちろりと鳴いつる。
廉おしろひのほひか、
けふの入日の顔へか、

あかあかと、母のお弓がチヨボにのり
泣けば……なげけば……蟲の音が……

芝居小屋の土間のむしろに
何時しか泌みて芽に出る
まだありなしの蕪の葉。

旅役者

けふがわかかれか、のうえ、
春もをはりか、のうえ。
旅の、さいさい、窓から
芝居小屋を見れば、

一〇九五

よその畑はたけに、のうえ。
麥の畑はたけに、のうえ。
ひとり、さいさい、からしの
花がちる、しよんがいな。

ふるさと

人もいや、親もいや、
小さな街まちが憎にくうて、
夜よふけに家いえを出でたれど、
せんすべなしや霧きりふり、
月つきさし、壁かべのしろさ紅べに
こほろぎがすだくよ、
堀ほりの水みづがなけくよ、

爪つめさき薄うすく、さみしく、
ほのかに、みちをいそげば、
いまだ寝ねぬ戸との隙ひまより
灯ひもさし、菱ひしの芽め生はに、
なつかし、泌しみみて消くえ入いる
油あぶら搾しぼ木ぎのしめり香かほ。



朱尼の集

朱泥の馬

林下の黙想

楢、椎、櫟、白楡の
瑞枝緑葉日もささず、
青霧薫る夏草や、
苔うちしめる森の白日、
氣は靜かなり、寂として
一鳥啼かず、露落ちず、
行けば玉笹徑に鳴り、
茶の木、黒文字、灌木の
清香、朝明の星に似たり。

轉じて月の露草や、
脛の白きに百合をわけ、
葉かけ、莓の紅を踏む
師と逍遙の清興に
瑞枝わかわか青透いて、
葉守る鈴ふる妙音に
鳥はやさしき鳥を喚び、
花に囁き葉にかくれ、
生甦る森の靈、
青きのみなる夏にして
嵐涼しき袂かな。
去つて檜杉の薄闇や、

五葉、柎、山楊梅の
蔭ある林添ひゆけば、
紅も可愛ゆき芽楓や、
柘榴の花は緋にもえて、
花神、宴の祝火かな。
涼風立ちぬ榮美しと
罪美しとこそひらきゆく
芭蕉彩玉玉巻葉、
廣葉緑に名を染めて
戀が平和の御帖かな。
咲きつくしたる白丁花、
釣鐘草は才に伏し、
風蘭の花、葛の花

高き愁に散らんとす。
鳥雲に入る朝涼を
眼あげて飛ばん鷺草や、
笑ふに似たる花糸爪、
獨り世相の繁を避けて
凌宵花、超然たり。
笛唇にあり、譜は自由に
悠々、雲の律吹いて、
師が影慕ひ迷ひ入る
山毛榉の林の深緑、
壯なるかな、大夏の
光と熱に闘ひて、
一葉落ちず、枝枯れず、

青葉天蓋、爵として
 千蟬贊する凱歌と、
 千歳立てる老樟の
 巨人の姿、嚴かに
 若き心を壓したり。
 ああ仰ふぎては眺めては
 血潮躍るよ、漲るよ、
 湯仰せちに靈幹の前
 雄心秘めむすべ知らず。

二

林は盡きぬ、枝と枝
 千枝青重き日の光や、
 倦じつつ立つ子が額に

割然として光射る
 夏の日眩ぶし、風涼し、
 遠山薄し、水白し、
 森はめぐりて家遠く、
 濃雲彩湧く野は青し、
 青し瑞草花草の
 瑠璃や玉藉く夏の御座、
 牡丹、撫子、花茨、
 薔薇、白百合、紅罌粟の
 戀集編むや亂れ反古
 秀歌點うつ紅のごと、
 驕綾なす美しさ。
 花薫る日は草も木も
 熱き黙示に香と蒸され、

青葉花濤、白銀の
光に咽びさゆらぐや、
亂れて鳥の律呂かな。

ああ歡喜の激濤の
戀の歌卷いくかへし、
卷きてや鳴らす秘め琴の
美し絃に頬ふれて、
花より花に香を縫ふや、
瞳の罪にうらまどひ、
醉ひつつ謳ふ戀の使者、
眼白、頬白、白光の
百千の征矢と渦卷いて、
美音、繪かぜにこぼるるよ。

泉は近し、薫る風、
水が香涼し、河骨や、
艶紫秀づる燕子花、
澤潟青き美しき
水草花床、妻ごもる
眞白水鳥、鴛鴦の
夢守る白日の雲淡はく、
汀、激漣、花二尺
藍透かしつつ翡翠飛ぶ。

この日この森歡喜の
鑿の韻のいみじさに、
こは神領と管投けて
感に堪へたる顔の上、

合歡、瓔珞の冠や、
希望榮ある身はここに、
鵲眼にみつ大夏の
快樂贊せむ辭を知らず、
涙ぐむ子が手をまいて、
老師の君は物言はず。

三

哀歌は遠し、千枝百枝
戀は果實に驕りたり。
柑子は青し、桃紅し、
無花果甘し、梨淡し、
日は暖かに鳥優に
濃藍、雲は湧くがまま、

光白銀波織るや、
彩翻る花の上、
吾、美しき眼をあけて、
美童戀ふると優しむ日、
瑠璃鳥が喙む紫の
葡萄青房、房たれて
葉かけ旗巻く紅雲の
靜かに美想開らくかな。
人、膝舐みて草の上、
戀の彩繪の驕飾にと
繪師が點ぜし影戀ひて、
花野逍遙ふ人のごと、
美しとこそまるらする
紅き林檎を掌にのせて、

夢見るらしき明眸に
ああ美しき黙思かな。
古りし驕か、樂人の、
金管とらむ指細う、
美少にかへるしばらくを、
戀秘めあへぬ兩頬かな。

それ青薰る月桂や
橄欖落ちるカムパニヤ、
黃金綾なす光浴びて
薔薇咲く野の夕まよひ、
環飾編まむ麗人の
若き驕の肩あけて
眞白細指、紅るの

唇濡めししは誰ならず。

羅馬は戀の可美國、
可美詩の園、藝の國、
白百合冠むる麗人や、
桂纏へる額白の
美少が國の驕はや、
金紙卷いたる銀燭の
翠帖、緋房、紅欄の
彩畫燦たる晴れの場、
曲は懸想の驕樂に
興、神來の律湧くや、
女子三千の春に酔ひ、
臙脂、紫、彩花の

花環彩織る中にして、
眩ゆき驕、歡喜の
頬ほてりしは誰ならず。

いま青草に身を投けて、
花環編みつつうつらうつら、
小鳥が樂に聞き惚れて、
瞳もたゆむ少人が
青春の姿、前にして
血潮のゆらぎ華と咲く
美し春の追想に
醉ひつつ夢見つつ儼れつ、
老師の君は物言はず。

四

譬へば戀の棺衣を
涙の瞳、震ふ手に
掲げて、悲し戀しさの
情火や燃ゆる、今さらに――
戀の終極の驕にと
花環、環飾、くさぐさの
黄を紅を紫を
美々しやとのみ搔きわけて、
あな、凄艶の死の影に
人、慘としてまどろぶごと、
いま、師は醒めぬ、露ちりぬ、
愕然として立ちあがる

頸冷たき白百合や、
物狂ほしうつと折りて、
挫きて頬の涙かな。

ああ追想の花櫓、
麗はし陣の彩夢を
突き崩したる汝は猛者よ、
ああ一莖の百合の露、
その露こそは悲しけれ。

老師は敗者、天來の
樂は俗耳にとどまらず。
界彩世を射る伶人が
麗はし額のよそほひに、

桂まゐらむ春しらず、
去つて傷まず故郷の
温き手に抱かれて、
戀や快樂や虚榮の
彩衣の経緯はたと捨て、
赤裸々、自然の律に眠る
優なるすさび春古りぬ。
古りて幾とせ、寂寥の
流石に泌むか頬の瘦せ、
おん眼の凹み力なう
あへぎて草に、そのかみの
美しかりし追想や、
ああ百合にして花の夢、
ああ露にして野のうつつ、

その露こそはかなしけれ。

縦し、虚榮に誇らしう

おん手をとらむ人もなけれ、

御情慕ひ懐きより

樂に親しむ少人を

可憐とおぼせ、青春の

血潮波うつ頬の紅

輝く瞳、管とりて

熟き「慰藉」と「嬌樂」の

力こめたるひと節や、

朗々として蕭として

ああさて律のおぼつかな。

何か口疾に狂ほしく、
花香青草踏みしだき、
踏みしだきつつ幾返り、
歩むに堪へず石に凭りて、
悄々として肩を垂れ、
老師の君は物言はず。

五

暹日赫々日神が
龍馬、天路の小軋に、
飛車銀輪の華やかさ。
玉駕はいまし白日の
鎮護を終へて迦具土の
大宮近き還幸に、

細雲凝らぬ一碧の
 四維八紘は赫として、
 眞紅燃え立つ莊嚴に、
 金矢銀矢を投げかけて、
 光眩ばゆき驕慢や、
 大日輪は炎々と、
 夏日激しき戦闘に
 勝ちほこりたるていたらく、
 光明と權威、常夏の
 神秘華嚴の譜を染めて、
 濃雲高湧く神興に
 千歳の史を翻すかな。
 廟あるかな、永劫の

神秘の韻、嚴として
 地の六塵を蒙らぬ
 天の匠の尊とさに、
 少人、熱き腕を組むで
 感涙そぞろとどまらず、
 いま紅るに紫に
 雲はうつろふ千々の彩、
 彩美しくしき天地に
 光添へんと生れこし
 詩歌の和子が夕暮を
 暫時、黙思に耽けらせよ。
 夫れ、遙かにぞ眞善美、
 神秘かしこき天堂の

扉驕繪、燦然と
今地に示す瑞相に、
萬象、美眸輝きて
讚美の環つくれども、
愚かや、地にひれふして
美妙の啓示、索めえず、
皮相の快樂、虚榮に
醉へよ、狂へよ、懂がれよ、
舞へよ、謳へよ、汝が額を
五尺秀づる靈ありて、
美し使命、星宿の
靈彩寶座、開らくべう、
神授の玉符、幻宮の
秘鑰、手にして立つ思ひ、

如かず、若うて偽らず、
戀憚らず、道問はず、
怖ぢず、惑はず、躊躇はず、
吾路直ぐに手を舉げて、
行かば走らば戀の國
美し國は開かれん。
楽しいかなや、うら若き
戀の籠子が小櫃の
燃ゆるがままに世も人も
皆美しき命あり、
うてばつめたき野の石に
默會清しき響あり、
ふるれば花に青草に
傲、小さき韻あり、

ああ歡樂と熱情に
額美しく刻まれて、
醒めむ期しらず酔へる子が
戀の薄衣手に撫でて、
青潮のごと湧き薫る
血の香に青春を讚へずや。

不興や人は眼を擧げて
夏眩ゆさの陽に堪へず、
崩るるがごとく草に伏し、
顔なく兩手、蒼白の
頬はも土に消えぬべう、
悲しや、稀に情えて
花と笑みぬる夕ながら、

ひと度怖ぢし靈にして
復、美しき血は湧かず、
秘密鏽浮く古甕に
紅の血の泌みぬごと
苦きとほしき涙かな。

六

ああ日は落ちぬ、驕榮に
善美を盡くし、戀足らせ、
紅旗、彩舟、平門の
美少麗人、華やかに
艶を極めて夕潮や、
紅る映ゆる波がしら、
水晶宮の藍戀ひて

水沫とまるび没りぬごと、
神、驕慢のおん手もて
壯美、端麗、嚴かに
擴げられたる大畫圖は、
卷かれもあへず魔が闇の
襲ふがままに暮れんとす。

森、嬌樂の律絶えて
美光、遅そく道るれば
醜姫領らす安國と
梟、蝙蝠、木鬼の
玉駕や迎ふ、亂雜に
讚歌あやしき黄昏を。
立てば眼に寂ぶ古柏。

櫟は鳴りぬからかると、
怖ぢて笑まるる夜の香に、
玉藻被つぎて美しう、
狐御寮も浮かれこよ、
風、夏草の戦のけば
蚯蚓、醜蜘蛛、斑藜
蜥蜴、蛙蟪、縞蛇の
集ふよ、百の魔を御して、
黒面朱鬚、冥想の
大なる顔あらはれて
呪咀の濃雲ときほひ來る、
あなやとばかりわなないて
ひたと寄り添ふおん袖や、
花とも咲かず、微笑ます、

默會冷たき巖のごと
 人、蟲としてみじろがず、
 汀に立てば罔象女が
 醜黒髪のさゆらぎに、
 野守の鏡鏽ふれて、
 罔祝ぐらしき冷聲や、
 可矣、美しき戀の譜と
 吾はた狂氣、石とりて
 投げつる水に興もなう、
 水草が香だにほのめかず、
 ああ船うけて浅茅沼
 しなへる棹をあやつりて
 早や山暮れぬ野暮れぬと
 泣く人もなき寂寥さや、

静かに水は暮れにけり。

惨たるかなや、白日の
 光と熱に疲れたる
 大野の土の息にがく、
 靈鮮かに活きむにも
 霧吐く驕わすれては、
 紅香のいきれ、天地の
 乾はける闇に風もなし。

ああ沈みゆく寂寞に、
 聖者が骨と地に曳いて、
 消ゆらん靈か人ゆけば
 冥府の影繪と添ふ闇の

他びしさ痛らさ悲しさに、
百合の花東眼にあてて
涙のごはむすべもなう、
沈黙闇沁む森を遠く
見送るに堪へず、走りいでて
おん名を呼べば力なく
かへりみしつうなだれて、
老師の君は物言はず。

全都覺醒賦

上

靜かにすすむ時の輪の
軌つたへて幽かにも、――
白光、小鳥にゆるるごと、
明日の香ゆらぐ夢の波、
薄むらさきにただよひて、
白帆はりゆく靈の舟、
まろらに薫る軟かぜの
千里の湖の樂の音と、
人が息吹は力ある
いのちの韻、永久に
血の脈搏と大地の
沈黙破りて響くまで、――
神澄みわたる雪の夜の
聖きひと夜を神祕なる

天の攝理と默示との
悟得るべく嚴かに、
書萬卷の蘆をいでて
雪に清しき頬をうたせ、
我、鶴髓のよそほひに
鵝毛みだるる玉階を
木々の白彩すりぬけて、
臺にのほれば雲晴るる
天は金沙の星月夜、
仰けば諸辰十二宮、
銀の瓔珞かがやかに
寶座を環る天宮の
靈彩高く、端嚴と
華麗を盡くし眞無量、

善美まつたく整へば、
燦爛として聖天に滿つ
永劫の光明と歡樂に、
頌歌あふるる微妙じさと、
香華みだるる眩ばゆさに、
渴仰あつく跪づき、
涙のごひてさらにまた
燃ゆる腫をめぐらして
闇に下界をうかがへば、
廣量無邊、雷圓う
包み繞らす雪絹の
無縫の衣、水の帶
無垢清淨のしろ銀の
衾白彩ひきかつぎ、

誓へば、佛陀、無憂樹の
榮光の花ふる瑞かけに
蘇生淨化の果をひそめ
いま寂滅の落日を、
瑞雲くだる白蓮華、
諸天諸菩薩比丘丘尼
優婆夷優婆塞うちめぐる
蓮座に薫る大菩提、
拈華微笑の尊とさに
しばし涅槃に入ることく、
いと安らかに嚴かに
ああ天が下、天の雲
そぎたつきはみ、疊なはる
青垣山の山脈の

むか伏すかぎり、八百潮の
潮の八百路の沖津波
邊にたつかぎり、秀つ國の
權威と光榮つかさどる
全都の偉靈二百万、
率つて白日の戦鬪の
その激甚と繁雜に
痛み傷つき倦み疲れ
闇にしばらく——白雪に
大傘かざし、深みどり
褪せず枯れざる驕慢に
白日、天の日あひしらひ
夕、月の輪貫きて
夜、天の宿を支へつつ、

世の盛衰をひややかに、
千歳の曆翻へし
神さび立てる常盤木の
古きにほひに佇みて
さらけすかせば、眼にくらき
九百九町の静まりに、
柳やなぎの家を守り、
冷たう光る大路の灯、
小路はくらし、病人の
夜の恐怖に血も冷えし
頬に沁み照る燭の灯か、
小窓を洩れて青白う
一點二點さゆらける。
聽けば巽に、聖代の

新領かけて三千里、
古海めぐる二千里の
國の日の本、四方に見て
鎮護まします王城の
夜を警しむる衛兵が
番ふ言葉も震帯び、
「休め」かしこし「寒し」「いざ」
「さらば」の聲の時折に、
さては安寧と平和に
市の夢守護る町々の
巡羅が警杖もねぶたげに、
ひびく地心の骨凝り
かくていよいよ更けゆけば、
遙か、水澄む大川の、

魚、氷に上るいきほひも
夜の、大氣の寒冷に
輪波、耳うちひびくほか、
大地しづかにふしまろび
一夜のなかに蘇る
生存の氣と活動の
大なる力、憧憬と
希望の熱情、満ち足らふ
夢に齋がせ、天ひびく
高き呼吸と音響と、
進めの律呂譜を納め、
ただ閑として眠るかな。

下

訪るべきかな、常闇に
長き沈黙を壓したる
権力を驕るほほゑみに、
いまはた、呼吸は世を回生す
巨人のごともうなづきて、
我、鐘樓によぢのぼり
夜は餘あり、とく醒めよ
醒めよ休息に鋭氣足る
全都の靈よ、活動の
一指に天を覆へす
威勢しめせと、大撞木
闇にひと振、渾身の
力をこめて鐘撞くや、
響殷々、澄みわたる